

ティムール家に關する一傳承について

間野 英二

中央アジアの生んだ世界征服者ティムールの生涯については、なお検討すべきいくつかの問題が残されている。ティムールの出自に關する問題もその一つであり、傳えられるティムール家の「系譜」の信憑性についてすら、なお定説が確立されていない情況にある。

ところで、最近タシュケントではじめて出版されたシャラフ・アッディーンの『勝利の書』の「序章」の *al-Muqaddima* を見ると、そこには「系譜」の信憑性を裏付けるかに見える一つの傳承が収録されている。それによれば、チンギス・ハーンの曾祖父にあたるカブルと、ティムール八世の祖のカチュェリとは、トゥメネ・ハーンより生まれた双子の兄弟であった。そして、この兄弟の間で、ハーン位はカブルとその子孫に、そして行政と軍事の實権はカチュェリとその子孫に屬するという一通の誓約書が交わされ、この誓約書は一三四〇年頃までハーン家の寶庫に收藏されて、實效を保ちつづけたという。つまり、これによれば、ティムールの祖先らは、常にハーンらを輔佐する重要な役割を演じつづけた事になる。

しかし、ニザーム・アッディーンなどティムール朝初期の歴史家達は、いずれもこの傳承を収録していない。それ故、この傳承を歴史的事實として認める事は、到底不可能といわねばならぬ。ただし、この様な傳承がティムールの歿後およそ二〇年の後に著わされ

たシャラフ・アッディーンの書その他に収録されている事實は、略奪者から世界帝國の支配者となりおこせたティムールの一族にとつて、一族の過去の日々をかざる榮光の物語が必要不可欠であった事を物語る。そして、この物語は、同時に、實權掌握後も單なるハーン家の女婿 *Kutagan* として、表面的にはハーンを輔佐して軍事・行政の諸事をとりおこなわねばならなかったティムールとその一族の立場を、明確に反映したものと見られよう。

カイイムトゥウ文書補論

山田 信夫

W. Radloff/S. Malov が 'Uigurische Sprachdenkmäler, Materialien nach dem Tode des Verfassers mit Ergänzungen von S. Malov herausgegeben. Leningrad 1928' のなかで發表した一〇三點のウイグル俗文書類のうち、*Qiyintu* という名の人物に關するもの二點 (Nos. 10, 11) 'Qayintu' のもの四點 (Nos. 19, 20, 28, 37) 'Qarintu' のもの一點 (Nr. 27) があつた。それはすべて Berlin collection のものであるが、原文書についてみると、みな同一名しかも同一人物 *Qayintu/Qay-yintu* であること、さらに同コレクション中の未發表資料のなかに同一人のものがなお九通あることもわかつた。この計十六通のカイイムトゥウ文書の存在については、昨秋、第十四回内陸アジア史學會大會における公開講演で報告したが、そのときは、十六通が同一人物に關するものであるこ

との論證を中心に、カイムトゥなる人物像のアウトラインをえがいたにとどまった。

今回は、この十六通——土地貸借六、農産物貸借七、棉布貸借二、土地讓渡一——の證文内容についてその後さらに考察を加えたところを報告し、中世トゥルフアン地方の一地主としてのカイムトゥ像を、より具體的に把握する補いとした。關連してウイグル文書にあらわれる土地問題について若干の問題を指摘したい。

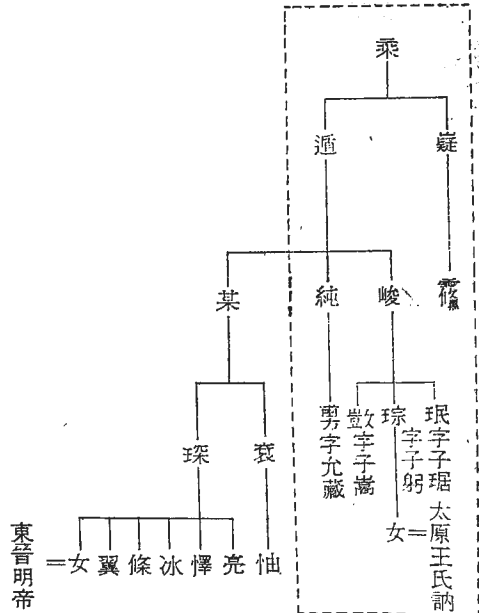
魏晉代の穎川庾氏について

多田 狷介

東晉代明帝の庾皇后の兄亮は、王導・王敦らに對抗する政界の重鎮であり、西府軍團の領袖としてのその地位は弟冰・翼へと繼承された。穎川鄆陵の庾氏が、いつごろに起源し、いかなる人々のどのような歩みによって一個の門閥貴族へと成長したのかをあとづけることが本報告の主題である。但し、今回は庾氏全盛の庾亮らの一つ前の、西晉末年の世代迄を一應の範圍とした。穎川庾氏という一個の事例からひき出される知見が、一般に門閥貴族制の形成期とされているこの時期の全體的認識とどの程度相互に流通してくるかが確かめたいところである。さらに、門閥への形成過程における學問教養——儒學や老莊——の機能と意味、「八王之亂」以降の混亂期における同族内個々人の處生と命運といった點にも觸れられたらと思つてゐる。

〔穎川鄆陵庾氏略系圖〕

點線内がほぼ、今回の報告範圍



清代臺灣の水利組織について

森田 明

清朝は三藩の亂に次いで康熙二十二年（一六八三）、鄭氏の抗清運動を抑え臺灣を領有下におき、中國支配を確立した。臺灣領有はその後雍正・乾隆へと展開される清朝支配の Extension の一環であった。時あたかも清朝は封建支配體制の相對的安定期を迎え、人